

2. 西欧製地図の分析

竹島問題の研究では、西欧作製の地図も研究対象となってきた。川上（1966）によれば、1779年のダンヴィルの『中国地図帳』所収の「朝鮮図」では、Tchiang-chan-tao（西側）とFanling-tao（東側）の2島が記され、前者は千山島の中国音で于山島のこと、後者は鬱陵島の中国音とし、この地図は韓国の古文獻にある于山島、鬱陵島二島説を任意に地図上に表記したものすぎないとした。またこの地図は後世のヨーロッパ製の地図に多くの影響を与えたとした。1787年フランスが現在の鬱陵島を発見すると、発見者たるダジュレーの名前が付けられ、地図に登場するようになった。続いて1789年イギリス船が同じ鬱陵島を発見し、乗艦の名前をとり、アルゴノート島としたが、正しく測量されず、実際よりも北西側に測量され、現在の鬱陵島が地図に2つ描かれることとなった。その後シーボルトは、日本図とヨーロッパ図とを対応させ、1840年の日本図で、アルゴノート島を竹島に、ダジュレー島を松島に比定し、その後の地図では誤った認識をもとに地図が作製されることとなった。さらに、1849年にフランスが現在の竹島を発見し、船の名前をとって、リアンクール島と呼ばれるようになると、アルゴノート島（竹島）、ダジュレー島（松島）、リアンクール島の3島が描かれることとなった。その後アルゴノート島（竹島）は存在しないことが分かり、1900年代に入るとダジュレー島（松島）、リアンクール島の2島が描かれることとなった。シーボルトの誤りによって、島名は混乱することとなったのである。一方韓国側では、ダンヴィルの「朝鮮図」に、Tchiang-chan-tao（于山島、西側）とFanling-tao（鬱陵島、東側）の2島が記され、現在の独島にあたる于山島が記載されていることから、西欧製の地図でも、独島は韓国領であるとしている。

そこで、本稿でもできる限りの範囲で、西欧製の地図を調査し、どのようにこれらの島々が描かれているか分析することとした。ただ、西欧製の地図は膨大な量に及び、また日本国内で悉皆的に調査をするのは難しいため、以下の方法をとった。一つは、すでに古地図集として出版されている本のなかで、秋岡武次郎コレクションのうち、『日本古地図集成』、『日本古地図大成』に収録される地図を検討した。さらに大阪大学附属図書館ではホームページ上で、「電子展示・西洋古版アジア地図」を公開していることから、この電子展示も利用した。最終的に、隠岐諸島、鬱陵島、竹島が掲載される日本およびアジア図74点を分析することができた。対象となった時代は隠岐諸島が記載され始める16世紀中期から、国境がまだ未確定の時代で、記されていない19世紀後期までとなった。分析結果は【別表2】にまとめた。

①18世紀中期まで

隠岐諸島のみで、現在の鬱陵島、竹島は記載されていない。この時代には、西欧では日本海西部では隠岐諸島しか認識されていなかったことが分かる。隠岐諸島は18世紀中期以降ほとんどの地図で記載されている。「日本図」のなかには、16世紀末期と伝えられる福井の浄徳寺所蔵日本図屏風、これと同系統の南蛮屏風や、「新撰大日本図鑑」（1678年）、石川流宣「日本海山潮陸図」（1691年）など江戸時代の日本図をもとに作製された地図もある。前者の日本図屏風、南蛮屏風には、隠岐と高麗の間に「磯竹」とあり、現在の鬱陵島が描かれているが、これをもとにした西欧地図には磯竹島は出ていない。なお、後者の日本図には、竹島、松島が描かれていない。

②18世紀中期～19世紀初期

18世紀中期の地図から、Tchiang-chan-tao（千山島、于山島）、Fanling-tao（鬱陵島）の記載がみられる。朝鮮半島の東側すぐのところ両島が描かれ、于山島は西側、鬱陵島は東側としていることから、

16世紀中期の朝鮮の「八道総図」をもとに作製された可能性がある。こうした地図が作製されたのは、川上の指摘のように、ダンヴィルの影響であると考えられる。ダンヴィル（1697～1782）は、フランスの地理学者で、1735年中国に滞在するフランス人宣教師たちが作製した地図に基づいて中国全図を製版し、1737年に『中国新地図帳』を刊行した。その後『中国新地図帳』は長くヨーロッパにおける標準的な中国地図として利用された。表には収録していないが、1737年『中国新地図帳』には「朝鮮王国全図」が収録され、そのなかに、Tchiang-chan-tao、Fanling-tao が記されている。この地図は、韓国・国立中央博物館が発行した図録『行ってみたい我が領土、独島』に収録されている。その後両島が記載されているほとんどの地図は、于山島を西側、鬱陵島を東側としている。また1750年の「日本図」にも、同様の記載がある。したがってこの于山島は独島ではない。これは、日本は江戸時代中期の日本図、朝鮮半島は「八道総図」と、2つの地図をあわせて作製されたためであり、島の帰属を表しているわけではない。

③19世紀前期

19世紀に入ると、Tchiang-chan-tao（千山島、于山島）を西側とし、Fanling-tao（鬱陵島）を東側とする記載以外に、新たに、Argonaut（アルゴノート）、Dagelet（ダジュレー）が記載されるようになる。これらはいずれも現在の鬱陵島である。つまり、この時期には、西欧地図のなかには、現在の鬱陵島が4つも描かれることになるのである。

Argonaut（アルゴノート）、Dagelet（ダジュレー）が記載されるようになるのは、西欧による測量成果に基づくものである。Dagelet（ダジュレー）は1787年フランスにより発見され、Argonaut（アルゴノート）は1789年イギリスにより発見された。なお、Argonaut（アルゴノート）、Dagelet（ダジュレー）には彩色がみられないことから、無人島、無主地であったと認識されていたことが分かる。この時期の地図は、伝統的な朝鮮図と西欧の測量成果があわせて記載された。

④19世紀中期～後期

19世紀中期には、それまでみられた Tchiang-chan-tao（于山島）、Fanling-tao（鬱陵島）が徐々に消えるようになる。別表2の68番イギリス製「日本・朝鮮図」（1851年）のように、架空の Tchiang-chan-tao（于山島）のみが消え、Fanling-tao（鬱陵島）、Argonaut（アルゴノート）、Dagelet（ダジュレー）の3島が描かれる地図もあった。なお、この地図には彩色もされ、Fanling-tao（鬱陵島）、Argonaut（アルゴノート）は黄色、Dagelet（ダジュレー）は無色となっている。島自体に地理的に混乱が生じているので、あまり意味があるとはいえないが、Fanling-tao（鬱陵島）、Argonaut（アルゴノート）は朝鮮領と認識し、Dagelet（ダジュレー）は無人島、無主地であったことを示している。1865年以降になると、Argonaut（アルゴノート）も消滅するようになった。こうした変化が生じるのは、西欧諸国による測量が活発となり、伝統的な絵図が否定されるようになったためと考えられる。

さらに、1840年のシーボルトの日本図により、西欧図と日本図との成果があわせられ、Argonaut（アルゴノート）が竹島、Dagelet（ダジュレー）が松島と記載されるようになった。以後西欧図ではこの表記が一般的となった。

現在の竹島が地図に記載されるようになるのはこの頃からで、Liancourt（リアンクール）と表記された。1854年フランスの捕鯨船リアンクール号によって発見された成果に基づくものである。ただイギリスの地図には、イギリス名 Hornet.I（ホーネット島）と表記されている。そして最終的には、Dagelet（ダジュレー）と Liancourt（リアンクール）の2島が描かれることとなる。別表2の72番1870年「中国・朝



図2-1 1870年「中国・朝鮮・日本図」(松島、リアンクール島周辺)

「中国・朝鮮・日本図」(ドイツ製)では、現在の鬱陵島を Matsushima (Dagelet.I) と表記し、その南東には、Liancourt.R (Hornet.I)、つまり現在の竹島も描いている【図2-1】。経緯度からも両島の位置は間違いない。興味深いのは、松島の西側に境界線が引かれている点である。この地図では、鬱陵島の西側が日本と朝鮮との境界であると認識としていたことが分かる。

なお、2004年1月15日付の朝鮮日報によると、独島を韓国領とした1894年のフランスの地図が発見されたと報道されている。1894年のフランスの日刊紙 Le Petit Journal に収録された地図で、「韓国・日本・東中国図」という表題である。韓国と日本の中に国境線を記し、鬱陵島とともに、独島が I.Ouen-San (于山島) と表記されているとする【図2-2】。漢陽大学の慎鏞度教授は、海上に明確な境界線を引き、独島の領有権を明らかにした地図の公開は初めてで、国際的にも独島は韓国領と認められたとしている。しかしこの地図をよく見ると、書かれているとされる鬱陵島は描かれていないようである。また独島としている I.Ouen-San (于山島) の位置は、経緯度から現在の鬱陵島にあたる。つまり、この地図の于山島とは、現在の独島ではなく、鬱陵島のことを指している。現在の独島の位置には何も描かれていない。19世紀末期の地図としては当時の測量成果に基づくものではなく、古いタイプの地図といえる。こうした間違いをするのは、于山島=独島という前提をもって地図をみているからであり、また地図史や地理学の研究を踏まえ、地図をみる際に重要となる経緯度すら確かめられないという、基本的な方法が間違っていることなどが背景にあるとみられる。

以上の分析から、18世紀まで隠岐諸島しか認識されなかった。18世紀中期になると、八道総図をもと

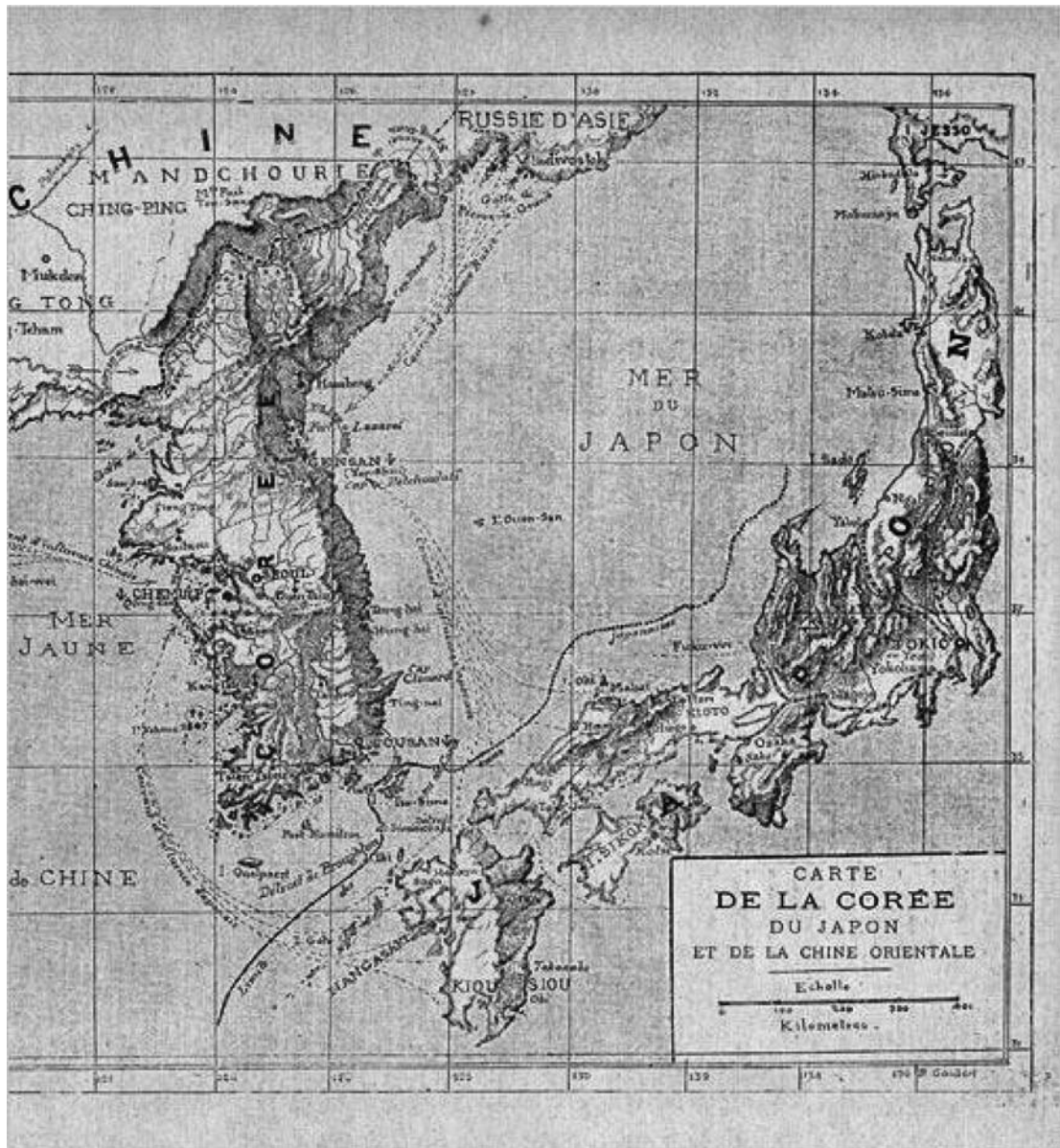


図2-2 1894年「韓国・日本・東中国図」

にして地図が作製されるが、于山島を鬱陵島の西側としていることから、鬱陵島は認識されるものの、現在の竹島は認識されておらず、隠岐諸島以外の島は正確に認識されなかった。19世紀前期には、西欧による測量成果が反映されるが、従来の地理認識も反映され、現在の鬱陵島がいくつも描かれるようになった。19世紀中期になり、ようやく正確に記載されるようになった。つまり、西欧製地図において、現在の竹島が記載されるのは、19世紀中期の西欧による測量成果による地図からであり、それ以前には記載されていなかった。于山島の表記は、朝鮮製絵図と同様、現在の竹島を表記したものではなく、また西欧製地図において、現在の竹島を朝鮮領として表記しているわけではなかった。

別表2 西欧製地図にみられる鬱陵島・竹島・隠岐諸島

絵図種類	番号	絵図名	年代	所蔵	Tchiang-chan-tao (千山島、于山島) 現在鬱陵島もしくは竹嶼	Fanling-tao (鬱陵島) 現在鬱陵島	Argonaut (アルゴノート) 実在せず	Dagelet (ダジュレー) 現在鬱陵島	Liancourt (リアンクール) 現在竹島	隠岐
西欧製 アジア図 日本図	1	アジア図	1572	大阪大学附属図書館	×	×	×	×	×	×
	2	印度付近図	1575	秋岡武次郎	×	×	×	×	×	×
	3	日本図	1585頃	フィレンツェ国立文書館	×	×	×	×	×	○
	4	日本図	1595	秋岡武次郎・南蛮文化館	×	×	×	×	×	○
	5	アジア図	1595	秋岡武次郎	×	×	×	×	×	×
	6	アジア図	1640	大阪大学附属図書館	×	×	×	×	×	×
	7	日本図	1646		×	×	×	×	×	○
	8	中国日本近傍図	1650	秋岡武次郎	×	×	×	×	×	○
	9	中国図	1650	秋岡武次郎	×	×	×	×	×	○
	10	アジア図	1650	大阪大学附属図書館	×	×	×	×	×	○
	11	日本図	1660	秋岡武次郎	×	×	×	×	×	○
	12	アジア図	1670	大阪大学附属図書館	×	×	×	×	×	○
	13	アジア図	1677	大阪大学附属図書館	×	×	×	×	×	○
	14	アジア図	1677	大阪大学附属図書館	×	×	×	×	×	○
	15	日本図	1680	秋岡武次郎	×	×	×	×	×	○
	16	アジア図	1683	大阪大学附属図書館	×	×	×	×	×	○
	17	大タルタリア図	1683	大阪大学附属図書館	×	×	×	×	×	○
	18	タルタリア・中国図	1690	大阪大学附属図書館	×	×	×	×	×	○
	19	東亜図	1690	秋岡武次郎	×	×	×	×	×	○
	20	日本図	1690	秋岡武次郎	×	×	×	×	×	○
	21	アジア図	1690	秋岡武次郎	×	×	×	×	×	○
	22	日本図	1700	秋岡武次郎・天理図書館	×	×	×	×	×	○
	23	アジア図	1703	大阪大学附属図書館	×	×	×	×	×	○
	24	アジア東部図	1705	大阪大学附属図書館	×	×	×	×	×	○
	25	中国・日本図	1710	大阪大学附属図書館	×	×	×	×	×	○
	26	日本図	1719	大阪大学附属図書館	×	×	×	×	×	×
	27	日本図	1738	大阪大学附属図書館	×	×	×	×	×	○
	28	新中国図	1738	大阪大学附属図書館	×	×	×	×	×	○
	29	新タルタリア図	1738	大阪大学附属図書館	×	×	×	×	×	○
	30	ロシア・タルタリア図	1739	大阪大学附属図書館	×	×	×	×	×	○
	31	日本図	1740	秋岡武次郎	×	×	×	×	×	○
	32	日本図	1740		×	×	×	×	×	○
	33	日本図	1744	秋岡武次郎	×	×	×	×	×	○
	34	タルタリア図	1745	大阪大学附属図書館	×	×	×	×	×	×
	35	新アジア図	1745	大阪大学附属図書館	×	×	×	×	×	○
	36	日本図	1749	大阪大学附属図書館	×	×	×	×	×	○
	37	日本図	1750	秋岡武次郎	×	×	×	×	×	○
	38	日本図	1750	秋岡武次郎	○(西)	○(東)	×	×	×	○
	39	日本図	1750	秋岡武次郎	×	×	×	×	×	○
	40	アジア図	1752	大阪大学附属図書館	×	×	×	×	×	○
	41	日本・朝鮮半島図	18世紀中期	大阪大学附属図書館	×	×	×	×	×	○
	42	日本図	1752	大阪大学附属図書館	×	×	×	×	×	○
	43	遼東及び朝鮮図	1752?	大阪大学附属図書館	○ Chiang-san-tau(西)	○(東)	×	×	×	×
	44	中国図	1755	大阪大学附属図書館	×	×	×	×	×	○
	45	シベリア・タルタリア・エルト・日本図	1755	大阪大学附属図書館	×	×	×	×	×	○
	46	中国領タルタリア図	1771	大阪大学附属図書館	○(南)	○(北)	×	×	×	×
	47	東北アジア図	1772	大阪大学附属図書館	×	×	×	×	×	×
	48	中国図	1776	大阪大学附属図書館	×	×	×	×	×	○
	49	中国・タルタリア図	1779	大阪大学附属図書館	×	×	×	×	×	○
	50	中国・朝鮮・日本図	1786	大阪大学附属図書館	×	○	×	×	×	○
	51	中国図	1788	大阪大学附属図書館	×	×	×	×	×	○
	52	中国領タルタリア・朝鮮・日本図	1788	大阪大学附属図書館	×	×	×	×	×	○
	53	中国・朝鮮・日本図	1788	大阪大学附属図書館	×	×	×	×	×	○
	54	日本図	1790	秋岡武次郎	○(西)	○(東)	×	×	×	○
	55	シベリア・中国領タルタリア・日本図	1794	大阪大学附属図書館	×	×	×	×	×	×
	56	中国周辺海域発見地図	1797	大阪大学附属図書館	×	×	×	×	×	○
	57	オホーツク海周辺発見地図	1798	大阪大学附属図書館	○(西)	○(東)	×	○	×	○
	58	中国図	1803	大阪大学附属図書館	×	×	×	○	×	○
	59	日本図	1804	大阪大学附属図書館	○(西)	○(東)	×	×	×	○
	60	日本図	1809	大阪大学附属図書館	○(西)	○(東)	×	×	×	○
	61	中国及び日本図	1810	大阪大学附属図書館	○(文字判読できず)	×	×	○	×	○
	62	朝鮮・日本図	1815	大阪大学附属図書館	○(西)	○(東)	○(無色)	○(無色)	×	○
	63	タルタリア図	1817	大阪大学附属図書館	×	×	×	○(無色)	×	○
	64	日本図	1835	大阪大学附属図書館	○(西)	○(東)	○(無色)	○(無色)	×	○
	65	日本図	1840	秋岡武次郎	×	×	○* 1	○* 2	×	○
	66	中国図	1844	大阪大学附属図書館	○(西)(島名記載なし)	○(東)	×	×	×	×
	67	アジア図	1847	大阪大学附属図書館	×	×	×	×	×	○
	68	日本・朝鮮図	1851	大阪大学附属図書館	×	○(黄色)	○(黄色)	○(無色)	×	○
	69	日本・満州・千島図	1864	大阪大学附属図書館	○(西)(島名記載なし)	○(東)	○	○	×	○
	70	中国・日本全図	1865	大阪大学附属図書館	×	×	○	○	×	○
	71	朝鮮図	1865?	大阪大学附属図書館	×	×	×	○(文字判読できず)	×	×
	72	中国・朝鮮・日本図	1870	大阪大学附属図書館	×	×	×	○* 3	○* 4	○
	73	日本図	1872	大阪大学附属図書館	×	×	○(点線)	○	○* 5	○
	74	中国・朝鮮図	1874	大阪大学附属図書館	×	×	×	○* 6	○	○

凡例 ○：絵図に記載あり ×：絵図に記載なし ()：写真では完全に確認できず

文献 A：南波松太郎・室賀信夫・海野一隆(1969)：『日本の古地図』、創元社

B：秋岡武次郎編(1971)：『日本古地図集成』、鹿島研究所出版会

C：中村 拓監修(1972)：『日本古地図大成』、講談社

大阪大学 web：大阪大学附属図書館ホームページ電子展示・西洋古版アジア地図

川上健三(1966)：『竹島の歴史地理学的研究』、古今書院

* 1：(Takashima) (Broughton)

* 2：(Matsushima) (de Laperouse)

* 3：Matsushima

* 4：Liancourt, Hornet.I

* 5：Hornet.I

* 6：Matsushima

出典	備考
大阪大学 Web : 1 B : 71 C : 解説10 B : 72、C : 解説15 B : 73	Tommaso Porcacchi (ベネチア刊)、オルテリウスのアジア図 (1570) をやや簡略にしたアジア全図。 メルカトル 手書、行基図、1585 (天正13) 年天正少年遣欧使節のイタリア訪問の際に所持した日本図をポルトガル語に訳出したもの ティセラ (アントワープ刊)、銅板、浄徳寺・小林型日本図がヨーロッパに伝わり描画されたもの メルカトル
大阪大学 Web : 2 C : 解説16 B : 74 B : 75	Nicolas Sanson (パリ刊) カルデイルム (ローマ刊)、地図は1614年頃完成、「日本殉教精華」所載 プラウ、隠岐の地名記載はなし プラウ
大阪大学 Web : 5 B : 76	Nicolas Sanson (パリ刊) サンソン
大阪大学 Web : 7 大阪大学 Web : 8 大阪大学 Web : 9 B : 77	Nicolas Sanson (パリ刊) Pierre Duval (パリ刊) Guillaume Sanson (ローマ刊) N.フィッセル
大阪大学 Web : 10 大阪大学 Web : 15 大阪大学 Web : 17 B : 78 B : 79 B : 80	Allain Manesson-Mallet (パリ刊)、隠岐の地名記載はなし Giacomo Cantelli da Vignola (ローマ刊) F. de Wit (アムステルダム刊) コロネリ コロネリ アラード、朝鮮東部の日本海に地名記載あり (読めず)
B : 81、C : 解説46 大阪大学 Web : 19 大阪大学 Web : 20 大阪大学 Web : 21 大阪大学 Web : 22 大阪大学 Web : 24 大阪大学 Web : 25 大阪大学 Web : 26 大阪大学 Web : 27 B : 83 C : p.26 B : 84	レランド (アムステルダム刊)、日本語の地名表記もあり、Cでは1720年頃とする、石川流宣「日本海山潮陸図」を翻訳したもの H. Scherer (ミュンヘン刊)、隠岐の地名記載はなし Nicolas de Fer (パリ刊) Herman Moll (ロンドン刊) Henri Chatelain (アムステルダム刊)、日本地図はヤソニウスの日本図(1650)を利用していることは疑いない。 Isaac Tirion (ベネチア?刊)、ケンペル(E. Kaempfer)の『日本誌』所載の地図に拠る Isaac Tirion (アムステルダム刊)、マルティニ図の系統 Isaac Tirion (アムステルダム刊) J.M. Hass (ニュルンベルク刊)、中国の部分は、1735年に「康熙内府図」を元に刊行されたダンヴィル(J.B.B.d'Anville)の地図によっている。 ケンフェル・スウェッテル ケンフェル・スウェッテル、日本語の地名表記もあり E.ボーウェン
大阪大学 Web : 29 大阪大学 Web : 30 大阪大学 Web : 33 B : 85 B : 86 B : 87	Guillaume de L'Isle (パリ刊)、東は朝鮮半島まで Isaac Tirion (ベネチア刊)、マルティニ系図 Gilles Robert de Vaugondy (パリ刊)、日本本土はケンペル図、大陸部分はダンヴィル図に基づいている ティリオン ロペール コレテ
大阪大学 Web : 34 大阪大学 Web : 35 大阪大学 Web : 36 大阪大学 Web : 39 大阪大学 Web : 43 大阪大学 Web : 44 大阪大学 Web : 45 大阪大学 Web : 47 大阪大学 Web : 48 大阪大学 Web : 49 大阪大学 Web : 55 大阪大学 Web : 56 大阪大学 Web : 58 大阪大学 Web : 59 B : 88	J. Gibson (ロンドン刊)、マルティニの中国地図 (No10参照) の系統に属する。隠岐の地名記載はなし Jacques-Nicolas Bellin (フランスの水路学者) Jacques-Nicolas Bellin (パリ刊)、ケンペルの『日本史』所載図の系統の地図 パリ刊、地図作者の名前はなく、「英国の地図からの模写」との記載がある。 Etienne-Andre Philippe de Pretot (パリ刊) (フランスの歴史・地理学者)、ダンヴィル図の系統、隠岐の地名記載はなし Gilles Robert de Vaugondy (パリ刊)、朝鮮などはダンヴィル図系統 Rigobert Bonne (パリ刊) (フランスの地図作家・技師)、ダンヴィルのアジア図(1753)を踏襲する北アジアの図 Gilles Robert de Vaugondy (パリ刊) Rigobert Bonne (パリ刊)、極めて忠実なダンヴィル型地図、隠岐の地名記載はなし Rigobert Bonne (ベネチア刊)、中国と東・北アジアの広い範囲を描いたダンヴィル型の地図、隠岐の地名記載はなし Rigobert Bonne (パリ刊)、ダンヴィル図の踏襲 Rigobert Bonne (パリ刊)、ダンヴィル図の系統の中国地図 Rigobert Bonne (パリ刊)、ダンヴィル図の系統 Rigobert Bonne (パリ刊)、No49の下半分とほぼ同じ内容の図 セーヤー
大阪大学 Web : 62 大阪大学 Web : 63 大阪大学 Web : 70 大阪大学 Web : 74 大阪大学 Web : 76 大阪大学 Web : 77 大阪大学 Web : 78 大阪大学 Web : 79 大阪大学 Web : 80 大阪大学 Web : 84 B : 89、川上(1966) : p.12	Lamarche (パリ刊)、シベリアから日本までを含む北アジアの図 La Perouse (パリ刊)、No3-68はフランスの探検家ラ・ペルーズ伯爵1787年に行った東アジア海域の探検結果を示したもので、日本・朝鮮・琉球の形はダンヴィル図を基調としながら、四国・九州についてはケンペル図を利用している La Perouse (パリ刊)、日本海北部からオホーツク海にかけての航海図。 Edme Mentelle, Pierre-Gregoire Chamblain (パリ刊)、E.Mentelleはフランスの地理学者・歴史家、P.G.Chamblainはフランスの地理学者・出版業者、全体としてはボンスの中国 (No36) を継承するが、蝦夷地・サハリンに関してはラ・ペルーズの探検結果 (No70) を取り入れている。 作者不詳 (パリ刊)、内容はダンヴィル図のほぼ全面的踏襲である J. Pinkerton (ロンドン刊) イギリスの地理学者兼出版業者、基本的にダンヴィル図の系統に属するが、本州北部・蝦夷地の表現はヴォーゴンディの日本図(1750)に一致する John Playfair (ロンドン刊) イギリスの地理学者、中国・朝鮮・日本のいずれもダンヴィル図の系統であり、新鮮味はない J. Thomson (エジンバラ刊) イギリスの出版業者。朝鮮はダンヴィル図の系統であるが、日本についてはNo76~78等の地図と比べて飛躍的な進展が見られる。何らかの新資料に拠っていることが明らかである。 J. Thomson (エジンバラ刊) No79と同じく Thomson's New General Atlasの一葉である。中国本土は、ダンヴィル型の図、蝦夷地、サハリンはラ・ペルーズの探検図 (No70) に拠っているが、北海道を含めた日本の形はNo79と比べて退化している。 J. & C. Walker (ロンドン刊) 彫版師。クルーゼンシュテルン、ケンペル等に拠ったことが記載される。日本の形状はケンペル図よりも正確性を増している。 シーボルト
大阪大学 Web : 85 大阪大学 Web : 86 大阪大学 Web : 87 大阪大学 Web : 90 大阪大学 Web : 91 大阪大学 Web : 93 大阪大学 Web : 94 大阪大学 Web : 95 大阪大学 Web : 96	William Johnston (エジンバラ刊) 地理学者A.K. Johnstonが、彫版師である兄弟のWilliamと共に刊行した地図の一枚。ヨーロッパ列島の進出により測量が進み、中国沿岸部は次第に正確精密化していくが、内陸部は依然としてダンヴィル図の踏襲である。 Victor Levasseur (パリ刊) フランスの地理学者。中国内部についてはこの時代でも正確な地理的情報がなく、ダンヴィル図の踏襲が続いている。 J. Rapkin (ロンドン刊) イギリスの地図作者。ウォーカーの日本図 (No84) に拠っている。朝鮮の形状はダンヴィル型から脱皮しているが、かえって現実性は失われている。朝鮮半島は黄色に彩色される。 John Bartholomew (エジンバラ刊) 地図編集で世界的に名高いパーソロミー家の3代目 John Bartholomew による地図。日本やサハリンの形は正確になっているが、朝鮮半島の形はなぜか退歩した図形になっている。 Adrien-Hubert Brue (パリ刊) フランスの地理学者。Atlas universel de geographie physique, politique, ancienne et moderne(1822初版)の、E.Levasseur 改訂による改訂版の一葉と思われる。 フランスのカトリック伝導団による朝鮮半島の全図 (パリ刊)。No79やNo87に比べてかなり形状が正確になっている。 August Petermann (ゴータ刊) ドイツの地理学者、シュティーター(A.Stieler)が1817年に刊行を開始したHand-Atlasの改訂版の一葉。ほとんど現代の地図と変わりのない中国東部・朝鮮半島・日本が描かれている。松島の西に国境線あり。 E. Weller (ロンドン刊) イギリスの地図作家兼彫版師出版業者。かなり実際に近い日本図で、シーボルトの日本製の地図に基づくものと思われる。シーボルトのNippon(1832-54)に収録された長久保赤水の「日本輿地略程全図」の図形を採用した可能性が高い。 J. Migeon (パリ刊) フランスの出版業者。中国内部は依然としてダンヴィル図の部分的修正にすぎない。日本についてははきめて正確な図となっているが、シーボルトが翻訳・刊行した日本製の地図に基づいているものらしい。